

- 一 雨続く蟻は倦まずに働ける
 二 靴に触れ銀盃草の揺れ始む
 三 歳時記の頁のしなり走り梅雨
 四 隣家より鼻歌聞こゆる更衣
 五 味うすく煮上げし豌豆盃かさね
 六 黙々と蟻の啜へて蛇の皮
 七 足音の聴こえぬけれど蟻の列
 八 かく小さき蟻に手足のうごめける
 九 菓子ひきて月の畳を蟻迷ふ
 一〇 ひと吹きで蟻卓上を飛行せり
 一一 なまけものがきつとあるはず蟻の国
 一二 蟻の列猫が跨いで去りにけり
 一三 蟻の道きつとどこかにたどりつく
 一四 羽蟻の夜便箋に置く「不一」かな
 一五 蟻踏めり鳴き声もなくつぶれけり
- 一六 蟻の列いくさは遠きことならず
 一七 走り梅雨ステルス艦が接岸す
 一八 青東風や黄なる光の願かけて
 一九 山蟻にみち譲るかに町の蟻
 二〇 先頭は誰が決めるか蟻の列
 二一 蟻の列乱すは小児の好奇心
 二二 黒き夜のしたたりのごと羽蟻かな
 二三 葉桜や教会の屋根黒瓦
 二四 はたらきあり足跡なんぞ残さざる
 二五 蟻よぎる駅へと急ぐ足元を
 二六 トネルの遠き出口や新樹光
 二七 厚底の錫のぐい飲み傘雨の忌
 二八 働きあり歌舞音曲とは無縁
 二九 真直ぐに伸びる木道夏来る
 三〇 藤房や今日も願ひの届かざる
- 三一 一匹の蟻止まりまた歩きだす
 三二 新樹忌も遠くなりたり藍浴衣
 三三 亡骸を巢に引き蟻の葬始まる
 三四 新しき靴で歩めば風薫る
 三五 たどりつくといふ字を書きて聖五月
 三六 蟻を見る我の背中を見下ろす目
 三七 朝風に命もらひぬ鯉のぼり
 三八 衣更えて海に行きたくなりしかな
 三九 その答えは風に吹かれて羽蟻飛ぶ
 四〇 一山をひとかたまりに若葉風
 四一 卯の花のあはき匂に誘はるる
 四二 その理由わかっているのに聖五月
 四三 沖光る新しき夏まつすぐに
 四四 通り過ぐ吟行の人蟻の列
 四五 薔薇さかり校庭午後の声あふれ

- 四六 阿夫利嶺へ梨花満開のうねりかな
- 四七 馬の背に蟻つかまりて茶馬古道
- 四八 行く春の満艦飾は沖を向き
- 四九 蟻の巢や迷路のやうな古き家
- 五〇 雨あがり蟻穴覗く子の静か
- 五一 夏鶯庭の小鳥と鳴きまじる
- 五二 蟻と蟻口づけかわし別れけり
- 五三 蟻塚を蹴つて女王脅かす
- 五四 菖蒲湯に顎まで古稀を沈めても
- 五五 さわさわと葉音を立てて夏の雨
- 五六 枇杷やさし赤子眠れる昼の家
- 五七 十葉もいとはず咲かせ一人住む